
クリムゾン・ガーデン

いろはのはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリムゾン・ガーデン

【Nコード】

N0107BA

【作者名】

いろはのはじめ

【あらすじ】

赤煉瓦の洋館に、生まれつき靈感、超能力と呼ばれる類いの能力を持つ、ひとりの青年が住んでいた。オカルト研究の学者であった養父の死後、彼は1本の鍵を見つけた。

その鍵で開いた地下室で、彼は血塗れの少年を発見した。その少年と暮す中で、彼は様々な怪奇現象や事件へと巻き込まれていく。

01 鍵

あの日いなくなってしまうたあのひと、今にもいなくなってしまうい
そうなのあなたに贈る。

封筒に入っていた1本の鍵。止まってしまった時計が、また、動き
出した。

鍵

古い扉に、鍵穴がひとつ。

鍵穴はぎこちなく鍵を飲み込んで。扉の向こうには急な下り階段。
その先には小さな部屋。その部屋の中心に置かれた金庫のような
箱。

青銅製らしい緑色の表面には、ビッシリと複雑な模様が彫り込ま
れている。

大きさは1メートル四方ほど。扉らしき場所には、取手も鍵穴も
ついていない。

なんととはなしに表面に触れてみる。冷たい金属の感触。

扉の中心に描かれたうずまきのような、薔薇の花のような模様を
指でなぞる。

「痛ッ」

指に小さな痛みが走る。彫刻部分に引っ掛けたのか、人差し指に
血が滲んでいる。

深い沼を思わせる緑のうずまき模様に、赤い色が加わる。

カチャリと何かが外れる音がして、箱の扉がゆっくりと開いた。

始めに、小さく蝶番の軋む耳障りな音。

次に、扉の隙間から溢れ出す赤い色の液体。

床へと円を描くように広がっていくその液体に、思わず数歩後ずさる。

そして、室内に充満する香り。むせかえるほどの血の香り。

最後に、最後に、開ききった扉の奥に詰め込まれたモノの姿に息が詰まる。

陶器のような白い肌。

折れそうなほど細い手足。

長い髪が顔へとまとわりついている。

ガタリと大きな音がして、ソレが箱の外へと転がり落ちる。

血塗れの少年。

動く事のできない僕の前で、その体は激しく痙攣し、口からは大量の血液が溢れた。

02 猫

こんな月の綺麗な夜には、どこからか呼ぶ声が聞こえる。

猫

「司、出掛けるのか。」

玄関に向かう後ろ姿は、何も答えない。

「司！」

もう一度、少しだけ声を強めて呼びかける。足音が止まり、少しだけこちらを振り返る。

窓から差し込む月明かりが、少年の影を細長く引き延ばす。司、僕がツカサと名付けた。

猫のような印象的な瞳、肩口で外側へと撥ねた黒髪、頭に巻かれたバンダナがまるで包帯のようだ。

闇に溶け込んでしまつかのような黒いＴシャツと半ズボン。冬の最中だというのに、見ている方が寒気がする。

「呼んでる。だから、行く。」

そんな呟きを残して、外へと出て行く。僕は急いで後を追った。目立ちすぎる銀髪にキャスケット帽を被り、滅多に使わないコートを羽織る。

痺れるような寒さに眼鏡が曇る。風に乗って、庭に植えられた沈丁花の香りがする。

花も木も暗闇の中、姿は見えないのに。

やっとの事で追いつけば、道路の隅に止まる小さなトラック。石焼き芋のカセットテープがエンドレスに流れている。

「、、、、、、おい。」

「要。お会計よろしく!」

料金も払っていない焼き芋を頼張る司に脱力する。

「まいどあり!」

愛想良く微笑む店主に頭が痛くなる。

「夜中に勝手に出掛けたあげく、焼き芋か!行きたいなら声をかける、声を!」

「そんなに怒んなくてもさ。1個食べる?」

その料金も僕が払うんだろうが。焼き芋屋が僕の剣幕をなだめるように間に入って来る。

「そうそう、そんな力リ力リしないで。お姉さん。」

「、、、、お姉さん?」

低い声で聞き返す僕の後ろで、司がケラケラと笑う。僕らの反応に店主が手を打つ。

「ああ、すいません。お母さんでしたか?」

「、、、、、、、、、、僕は男です。」

「ええ!」

自分が身長も低めで女顔だという事は、充分理解はしているし分かってはいるのだけれど、、、、。

普通に驚く店主の反応に虚しさが募る。

「すいません、お会計お願いします。」

「、、、、まいどあり。」

コートのポケットに財布を入れておいて良かった。

焼き芋屋トラックから帰る帰り道、見晴らしの良い広い道路で突然司が立ち止まる。

「どうした?」

じつと道路の一角を見つめ、そちらへと足を進める。

近くの街灯の電球が切れかかって、チカチカと点滅する。僕も司

の後ろから覗き込む。

そこにあつたのは黒い毛だらけのカタマリ・ところどころぐつし
よりと赤黒く濡れている。

見開いた瞳は作り物のように一点を見つめたまま。だらりと下がる
手足。大きな黒猫の死体・

おそらく車に撥ねられたのだろう。

司はおもむろにソレを抱き上げると、うつむき加減に何度も瞬きを
繰り返す。

「こつちだ。」

不意にそう言つて、走り出す。血塗れの猫を抱えたまま。

何かを探すように時折立ち止まっては辺りを見渡す。

どのくらいの距離を走つたのだろうか、息が切れて寒さに吐く息
が白い。

たどり着いたのは、人気のないファミレスの駐車場。

「見つけた。」

1台の赤い車のボンネットを覗き込む。フロントのライトの近く
が少しへこんでいる。

よく見ると少しだけ色が違って見える。車体の赤に滲む暗く変色
した赤。

「おいっ、オレの車に何してる!」

突然後ろからかけられた声にビクリとする。感じの悪い男がこち
らを睨みつける。

「あんた、今日、猫、撥ねたろ。」

止める間もなく、司が言い放つ。たまたま近くを通つた車のライ
トが僕らを照らし出す。

猫の死体、血塗れの服が数秒だけ光の元に晒される。男の顔色が

変わる。

「な、なんなんだ！お前ら！、猫が、猫が飛び出して来やがったんだ！」

自分は悪くないとでも言うかのようなセリフを、男は早口で言う
と逃げるように車へと乗り込む。

エンジンを噴かし、急発進して駐車場を出て行く。車の走行音が
遠ざかっていく。

強い風が悲しそうな声をあげながら、落ち葉を巻き上げる。

その音が突然、かき消される。

耳を塞ぎたくなるような激しいブレーキの音。

続く重い衝突音。何かを叫ぶ人の声。

「飛び出したんだから、しょうがないよね。」

司が、ゆっくりと猫をなでる。

「もう帰ろう。その子を、庭に埋めてやろう。」

僕は、コートを脱いで猫を包んでやる。すぐ近くから猫の鳴き声
が聞こえた気がした。

どこからか漂う沈丁花の香り。

いつだって忘れてはいけない。

姿が見えないからといって、ソレが存在しないとは限らないとい
う事を。

03 来客

この館は来客を拒む。館に招かれる者だけがここに訪れる。

来客

椿の花が咲いた。僕は1階のサンルームでそれを眺める。
ひとつ角砂糖を入れた生姜湯をテーブルに置いて、安楽椅子でくつろぐ。

染め抜いたかのように見事な紅色の花びらと黄色い花卉、深い緑色の艶やかな葉の色合いが好きだ。

司は絨毯の上に寝転がって、ルービックキューブのパーツを回す。
回してはいるが解く気はないのか、同じ箇所を同じ方向に回し続けている。

その手が止まり、ふと何か思いついたかのようにこちらに眼をやる。

そして、よくわからないといった様子で首を傾げた。

「パズル、解けないのか？」

「いや、なにか聞こえたような気が。」

「なにも聞こえないけど、」

音がすると思ったら、庭からかと思いいガラス戸の方を見て、言葉に詰まった。

椿の樹の前にひとりの女性がしゃがみ込んでいた。

「こんにちは。」

「！、、、こ、んにちは。」

司が声をかけると女性は驚いたように顔を上げ、戸惑うように挨拶を返した。

その顔は涙でぐしゃぐしゃだった。

春が近いとはいえ、外はまだ肌寒い。女性は紺色のハーフコートで、僕は上着の上にコートを羽織る。

司はいつでもバンドナと半袖、半ズボンだ。

「何か、あったの？」

「あなた達誰？ここ、どこなの？」

この屋敷の敷地にいる理由など聞かずに、唐突な質問を投げかける司の言葉に女性が不信感を示す。

僕は慌ててフォローへと回る。

「僕是要。こちらは司。ここは僕の家。」

ここに来れたという事は、、、何かあったから、じゃないのですか？」

女性は複雑な、悲壮な表情を浮かべて黙り込んだ後、視線を地面へと落とした。

落ちていた木の枝で地面に意味のないラインを引きながら、ポツリ、ポツリと話を始めた。

「私は、何をやっても全然ダメ。」

「姉さんは何でもできた。天才だった。とてもうらやましかった。」

「もう嫌で嫌で。姉さんと比べられるのが。」

「だから、、、消えてしまおう、終わりにしようって。」

「流れの速い川に飛び込んで、なのに。」

「なのに、姉さんが助けてくれて。」

「でも、姉さんは、その後、流れに、飲まれて、流されて、、、
見えなくなつて。」

女性は泣き崩れて、その後は声にならない嗚咽が続く。

椿の花が落ちる。美しい花が丸ごと一輪、首を刎ねられたように。

「私がいなくなれば良かったのに。」

「何で姉さんが死んで、私が、まだ、生きて、、、。」

遠くから救急車の音が聞こえる。悲しげなサイレンの叫び。世界が夕日の色に染まり始める。

「もう戻った方がいいんじゃないですか？あまり長い時間ここに留まらない方がいい。」

「え!？」

僕の言葉に、女性は改めて辺りを見回す。

「私、どうやってここに來たのかしら？」

「もう、間に合わないよ。」

司の冷たい声が響く。救急車が去って行く。サイレンの音が聞こえなくなる。

「もう終わり。でも、喜ぶべきかな？」

もう姉さんと、比べられる事も、罪の意識に苛まれる事も、ないから。」

「それってどういう事？」

「、、、、、、、、。」

「、、、、、、、、。」

黙り込む僕らの前で、女性の姿がだんだんと薄くなり、後ろの椿が透けて見え始める。

「そんな、そんな、、私、まだ、死」

声はそこで途切れ、女性の姿も完全に消え去った。まるで不思議の国の猫のように。

どこかの病院でひとりの女性の心電図が平行線に変わる。枕元には椿の花。

椿の花が落ちる。また一輪。

夕暮れに染まるサンルームには、完全に色の揃ったルービックキユーブと冷たくなった生姜湯のカップ。

「要、間に合わないとわかった時はどうすればいいのかな？」

めずらしく寂しげな司の言葉に、少しだけ違和感を感じる。

今日の女性の事なんて自業自得だと言いそうなもののに。

「僕らだってなんだってできる訳じゃない。できるだけの事をするだけだよ。」

「そう、、だよね。」

そしておもむろに顔をあげて、満面の笑顔を浮かべる。

「要、ベランダに布団干しっぱなしにしてたの忘れてた。もう夕方だしこの寒さじゃ布団はヒエヒエだね。」

「な、なんてありがた迷惑な！間に合わなくなる前にどうかしろ！」

椿の花が落ちる。また一輪。

去年も今年も来年も変わらずに繰り返される事にどれだけの意味があるのか。

僕は太急ぎで布団を取り込みにいく。なにもできないのなら、考えたって仕方ないだろう。

そう言っただけで過去から逃げないと、今に押しつぶされてしまうから。

04 路地裏

朝は目玉焼き、昼は卵焼き、夜は茹で卵。365日、同じメニュー。

路地裏

「要」

司が僕の名を呼ぶ。

「卵、飽きた。他の料理は作れない？」

遅い昼ご飯の卵焼きを突ついていた箸の片方が、左手から転がる。頭にはバンダナ。珍しくオーバーオールだ。

「他の料理？」

食卓に転がった箸を拾ってやりながら、考える。

利き手は左らしいが、持ち方は適当で手つきはおぼつかない。

よくよく考えてみれば、養父であった教授が死んでからは、他の料理を作った覚えがない。

「何が食べたい？」

司は、少し難しい顔で黙り込んだ後、

「いつもの、メニュー以外。」

「卵かけご飯と、かき玉スープ。いや、オムライスにするか？」

「要、、、いつもの、食材以外の料理で。」

僕は司を連れ、街に買い物に出掛ける事にした。

いつの間にか、建て変わった家々やお店を横目で見ながら街を歩く。

見事に咲いた木瓜の枝には、鈍い色のウグイスが一羽。

さえずる事を忘れたかのような悲しい眼をして枝にとまっている。料理を作るのに、街に買い出しに行かなければいけないのは、い

つもの食材しか家にはないからだ。

普段は、通販で食材を宅配してもらっている。宅配は一週間後だ。

街を歩けば、よけいなモノも眼に入ってきてしまう。

サラリーマンの肩に乗る髪の高い女性、橋の欄干に紐1本でぶら下がる男性。

公園のブランコを揺らす影のない少女。普通の人には見えない人達。

彼らに気づかないフリをしながら、足早に通り返る。

司は気にしていないようだが、直前で避けて通るあたり、やはり見えてはいるようだ。

墓地の近くを通らないように迂回した細い路地で、別の意味で危険な人達に遭遇した。

路地の途中で、黒服の男達に周りを囲まれた。

多少の（人間以外に対する）リスクは覚悟して家を出たのだが、自分の運のなさに悲しくなる。

男達のリーダーらしき赤毛の男が、こちらへと1歩踏み出す。

「おい、銀髪の姉ちゃんとガキ。怪我したくなかったら財布出しな。」

ギリリツと自分の歯が噛み締められる音が聞こえた。「姉ちゃん」という言葉に心がざわめく。

「僕は、男ですから。」

心をかみ殺しながら、低い声でそう告げる。

「下手な嘘なんてついたって無駄だよ。なんならここで脱がしてやるのか？」

男達の間で笑い声があがる。

「すっげえ体細え、ウエストいくつ？」

「その眼鏡、せつかくの美人がもつたいない。コンタクトにしなよ。」

「色白に銀髪ってセクシー！モデルでもやってんの？」

男達が口々に勝手な事を言う。

「さあ、おとなしく金出しな。」

赤毛の男の右手が、強引に僕の肩を掴む。

「触るな！！」

自分の声が震えて、遠い過去の記憶がフラッシュバックする。

白い部屋、激しく揺れる視界、台所、そして、激しい痛みと、赤い、赤い、嘘のように赤い。

その後の事はよく覚えていない。

気がつけば、路地裏に立っているのは僕と司だけ。周りには、男達がすべて倒れている。

周囲をぼんやりと眺めながら、拳に付いた血をハンカチでぬぐう。

「要、強いね。」

「、、、買い物しに行かないとな。」

僕は司の言葉を見殺して、その先のスーパーへと向かう。

食材を買って、別の道を通って家へと帰った。夕飯は、カレーライスにした。

ウグイスはいつあの鳴き方を覚えるのだろうか。

弟が、もうここにはいない弟が、カレーが好きだった。

カレーの作り方を教えてくれたあの人も、弟も、もういないのに。僕はまだこの世界でカレーを作る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107ba/>

クリムゾン・ガーデン

2011年12月31日04時52分発行